

Title	シニョアの利潤論
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.7 (1927. 7) ,p.944(102)- 970(128)
JaLC DOI	10.14991/001.19270701-0102
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270701-0102">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270701-0102</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## シニョアの利潤論

濱田 恒一

(一)

「資本が特定の人々の手中に蓄積せらるゝや直ちに、彼等の或者は勤勉なる人々を雇つて労働に従事せしめて之に材料と生活資料を供給し、以て彼等の労働成果を販賣し又は彼等の労働が材料の價値に添加する處に依つて利潤を獲得せんとす。貨幣労働其他の貨物と完成品とを交換するに當つては、材料の價格及び労働者の勞銀を正に支拂ひ得べき處以上に、何物かゞその資本をこの冒險に賭したる企業家の利潤として與えられざるべからず。故に労働者が原料に添加する價値は、此の場合二つに分たる。その一は勞銀を支拂ひ、他は雇主が前拂せる材料及び勞銀の全ストックに對する雇主の利潤を支拂ふ。雇主は労働成果の販賣よりして、自己の資本を補填するに足る以上に何物かの期待なくんば、労働者を雇備するの興味を有する能はず。又彼の利潤がその資本の大小に何程か比例せざらんば、小資本よりも大資本を使用せんとするの興味を有せざるべし」。アダム・スミスは此の如く云ふ(W. of N. Cannan's ed. Vol. 1, p. 50)。而してボエム・ヴァヴェルクは、こゝに「アプスチネニス・セオリ」の片影をみる。即ち此處に、「現在の快樂」と「將來の利潤」の對立をみる(Capital and Interest p. 271)而してスミスに在つては利潤は地代及び勞銀と共に自然價格の一部を形成し、市場價格は該自然價格に一致せんとするの傾向を有す。自然價格は窮局生産費に歸着す。曰く「一物の價格が自然率に於ける地代勞銀及び利潤を支拂ふに足り、それ以下にも以上に非ざる時、貨物はその自然價格と稱せらるべきものにて賣却せらる。かくて貨物はその價する處のもの、即ち之を市場に齎らす人に眞實に費えとなる處のものにて販賣せらる」(W. of N. p. 57)。

リカードオも亦生産費を以て價格を窮局に支配するものと信ず。「貨物の價格を窮局に支配するものは生産費にして、屢々言はれたる如く需要と供給の比に非ず」と。又曰く「貨物の相對的價値は、その生産に投じられたる相對的労働なり」(Prin. of Pol. Eco. Goner's ed. p. 373 & p. 39)。這個の生産費中に利潤が入るべきや否やは必ずしも明瞭ならず。元來實業界の人にして、利潤の何たるかを熟知せる彼にとつて、之が抽象的論議は多くの興味を喚起し得ざりしなるべし。併し乍ら「原論」第三九頁(Goner's ed.)に附したる註よりして、利潤が生産費中に入るものとも考うるを得べし。

「資本利潤の本質とは如何、又如何にしてそは發生するや」。これロウダーデイルが發せる疑問なり。これ洵に彼以前の經濟學が充分に論議する事なかりし問題なり(Landerdale. An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth. 1804. p. 155)

たスミスが「資本が特定の人々の手中に蓄積せらるゝや直ちに、彼等の幾人かは、勤勉なる人々を雇備し之に材料と生活を供給して、労働に従事せしめ、彼等の勞作物の販賣又は彼等の労働が材料の價値に添加せる處に依つて、利潤を爲さむとす。貨幣労働又は他の財と完成品との交換に於

て材料の價格及び労働者の勞銀を支拂ふに足る以上に何物かゞ、その資本を這個の冒險に賭したる企業家の利潤に對して與えられざるべからず。故に労働者が原料に添加せる價值はこの場合、二つに分解し、その一は、勞銀を支拂ひ他の一は材料及び勞銀の全ストックを賅したる雇人の利潤を支拂ふといひ、更に之を説明して「資本の利潤とは、種類の勞銀即ち、監督及び指揮の勞働の勞銀の別名と考えうべし」故にそれは、「勞働の處産よりの控除なり」と云へるのみ(W. of N. Vol. I. p. 50. p. 67)。

ロウダーデイルは之を評して、「若し斯說にして資本利潤の正當且つ精確なる觀念なりとせば、資本利潤は収入の派生物にしてその源泉に非ず、従つて資本は富の源泉と看做さるゝを得ず。その利潤は労働者の懷中より資本所有者の懷中へ移されたるものに過ぎざるべし」と云へるも (ibid. 157-8)、後年の社會主義者の如く、之を肯定する事なく進んで自説を主張して曰く「利潤なるものは、資本なかりせば人手を以て行はれるべき一部の労働の代りを資本がなす事若しくは、人間自身の努力が完成し能はざる部分の労働を爲す事より發す」と云へり (ibid. 161)。

然らばそれは生産費中に算入せらるるや否や、不幸にして之を彼は論ずる事なし。

マルサスに従へば一切の交換價值はその名の示すが如く一物を他物とを交換せんとする意思及び力に基く。凡ゆる交換はより多く欲する一貨物と交換に何等かの他貨物を與えんとする意思及び力のみならず、その欲する貨物の所有者側に於てもそれに對して提供せんとする貨物に對し、相應する需要存せざるべからず。かゝる相互的需要の存する時にのみ、交換は成立の可能性を有す。既にかゝる需要の存する時、交換の成立する率即ち一定量の他貨物に對し、一貨物が與えらるゝ割合は

所有せんとする願望及びその所有を獲得するの難易に基いて、當事者が貨物に對して抱く尊重の相對的關係に左右せらる。かくして結ばれたる契約は個々人の願望と力の必然的相違に依つて、最初は頗る區々たるも一定の時を経て平均を生ず。かくて一切の貨物に就いて通用價值 (current value) 樹立せらる (Malthus. Principles of Pol. Eco. 1820. p. 52-54)。

此の如く交換價值は交換の意思と力に基く。この意思と力とは需要及び供給となる。かくて貨物の相對的價值は供給と對比せられたる需要に依つて定まる。決して需要若しくは供給の一方に依る事なく常に相互の關係に基く。

かゝる需給の相對的關係は交換價值をして窮局その生産費に歸着せしむ。この場合、生産費なるものはアダム・スミスの認めたる要素を總て包含するものと解せざるべからずといふ。即ち利潤地代勞銀の三者を包含する限りに於てのみ然るといふ。

實際の交換に當つて之に影響する事情は、需給の關係に限るとはいへ、人間が願望の對象は殆んど總て人間の努力の媒介に依るものなるを以て、如上の對象の供給は、かゝる努力の量と方向、過去の勞働の成果より受くる助力及び原料と労働者の食物の多寡に支配せらる。生産が繼續されんが爲めにはこの三者が繼續的に供給され得るに足る價格を必要とす。マルサスは之を必要價格といひ、これを以て、アダム・スミスが自然價格と云へるものに、精密に一致するといふ (ibid. p. 78-83)。

更らにマルサスは「Definitions」に於て、貨物の自然價值とは自然的普通の狀態に於ける評價にしてその第一義的生產費即ち供給條件に依つて決定せらる」といひ、「第一義的生產費とは供給條件に同

じく「供給條件とは生産に必要な蓄積労働及び直接労働量の前拂にして、該前拂が爲されたる時に對する通常の利潤に等しき利率(percentage)を含む」と明言せる事に依りて(Definition in Pol. Eco. 1827)生産費中に利潤を包含せしめ、交換價值が窮局この生産費に支配せらるゝを認めたるものといふを得べし。

マカロックに従へば、生産とは既存の物を占有し變化し以て、吾人の欲望を満足し吾人の享樂に貢献するに適せしむる事に依つて、效用、従つて交換價值を生産するの謂なり。故にかく用ゐらるゝ労働のみが富の源泉なり。自然は一切の貨物が作らるゝべき物質を自發的に供給すると雖も、その物質の占有又は之を吾人の用に適せしむる爲めに労働が費さるゝ迄はそは、全然價值を有せず、従つて富を爲すものとは、考へられず」(Prin. of Pol. Eco. Ward & Lock's ed. p. 3940)。而も彼にとつてレントはリカアドオに對すると等しく「土壤の自然的固有の諸力の用に對し、農夫が地主に支拂ふ土地收益の一部にして「耕作さるゝ最不良の土地より得る収益額と然らざる土地よりの収益額の差たるものなり……されば穀物はレントが支拂はるゝが故に高きに非ずして、穀物高きが故にレントは支拂はるゝなり」(ibid. p. 142-144)。従つてレントは生産費に入るべき理なし、利潤は如何。

先づ翻つて資本に關する彼の見解をみるに、資本とは一國內に存在する勤勞の所産の一部にして人間生存の支持か、又は生産を容易ならしむる爲めに直接に利用し得べきものなり……換言せば凡ゆる種類の資本は過去の勤勞の處産の蓄積又は貯藏に過ぎず」(ibid. p. 55. 60)。既に労働を以て富の唯一の源泉なりと看做す以上資本を以て蓄積されたる労働と考ふるは當然なり、然る以上「資本の用に與えらるゝ利潤をも、労働となさざるべからず、彼も亦之を爲せり。曰く「資本利潤とは、蓄積されたる労働の労働に對する別名に過ぎず」(Encyclopedia Britannica Supplement 1823)かくて生産費とは「貨物を生産し、之を市場に齎らすに要する労働量なり」との定義を生み、一應は明瞭なる如きもこの「要する労働量」中に、「蓄積されたる労働の労働」が含まるゝや否やは未だ明かならず、彼自らの云ふ處に従へば彼の云ふ生産費とは「アダム・スミス及びガルニエーが自然價格又は必要價格と名付けたるもの」なり(ibid. p. 134)。従つて之は當然に利潤を含むものなり。(註)

(註)かゝる主張の中には、一見矛盾なる觀念を含めるものゝし如し。即ち彼は地代は生産費中に入らずと稱しながら、その生産費が、地代利潤及び労働より成るスミスの自然價格に同じと云へる事之なり。

ロングフィールドの利潤論はシニョアの所論を想起せしむる事最も多大なり「労働者は、利潤の爲めに自己の爲し得る享樂を抑制する人より引出されたる前拂に依つて生活す」と云へるが如き一例なり。(Longfield, Lectures on Political Economy 1834 p. 167.)

先づ生産費と利潤に關する見解を見るに、彼は前掲書一六三頁以下に於て、詳細に生産費を分析したり。曰く、

「例へば木綿のガウンの生産費を分析せんに、運送費は原料費の一部を爲す。船の價格は種々なる積荷の運賃に依つて支拂はる。就中ガウンの原料がその一部を爲す處の運賃に依つて。この運賃の一部は船の航海費に、一部は通常の利潤を伴つて船の原生産費に充當せらる。この生産費の中には、例

へば船を建造するに用うる釘を含む。また、これ等の釘の製造費の一部は鐵礦採掘機械の價格の一部を爲す、此の如き分析を諸君の想像が延びる限り諸君の心中に於て行はれよ。然らば諸君は最も遼遠なる時代に於て一定の勞働の使用及び資本の蓄積がこの木綿のガウンの製造に、間接に貢獻せるを見出さるゝなるべし。かくの如くんば、帝國內に蓄積されたる最初の資本が、このガウンの生産に影響を有すべきは言を俟たざるべし。否更らに、この遼遠の資本が、このガウンが現在の所有者に依つて著古され終るまでは、その全利潤を生ぜざる事も或はあり得べからむ(ibid. p. 163-164)也。この説明に依つて一生産過程に於ける生産費中には該過程以前の過程に於ける一切の利潤が算入せらるべきは明なるも未だ該過程そのものの利潤が、その過程の生産費中に入るべきや否やは必ずしも明瞭ならず。故に吾等は、これを去つて彼が價格論を一瞥せむとす。

「貨物の價值を支配する諸事情を詳細に檢するの要あり。此點に關し、一般に所謂自然價值又は生産費と、交換價值又は市場價格とが區別さるゝは正當なり。抑々價值なる名辭は寧ろ後者に屬するを適當とす。前者は一物の生産費がその交換價值に影響するが故にのみ、這個の名辭に價するのみ自然價格は所謂生産費に依つて測定せらる即ち市場に對し貨物を生産するに必要な勞働量に依つて測定せらる。これが自然價值と稱せらるゝは、貨物が、通常の利潤を伴つて、絶えず永久に賣却せらるゝの價格なるが故なり。そは亦、自然が人類に貨物を供給するの價格なり。そは貨物の生産に際し、製造家が目的とせる價格にして、交換價值又は市場價格は之に一致せんとする不斷の傾向を有す。貨物の交換價值又は市場價格とは、人がこれと交換に與えんと欲し又は獲得し得べき額なり。

この價格は需給間の比に左右せらるると稱せらる。然るにこの命題は充分なる説明なくんば、人をして一物の價格が如何になるものなるかを推察せしむる能はざるべし。然し乍ら斯問題は決して困難なるものに非ず。需給の變動が如何にして貨物の交換價值に影響するかを解剖するならば、吾等は交換價值とは供給と有效需要の間に平衡を生せしむるの價格なりとの結論に導かるべし又一物の市場價格はその自然價值に左右せらるると雖も、需給の變動の結果一時的に之と分離するの傾ありといふ事も亦真なり：：偶然の浮沈に依つて市場價格が、一時生産費以下に下り或は以上に昂る事あるべきも、然も前者は後者に一致せむとする強き傾向を有す」(ibid. p. 367)。這般の引用句は彼も亦、若しトレンドに先だちたりしならば、その批難を浴びるべき一人なりし事を立證するに足るべし。

## (一一)

トレンドが尊むべき批評は此點に集中せらる。

價格には二種あり。市場價格及び自然價格之なり、市場價格とはその名の示すが如く市場に於ける交換に依つて、一貨物を取得せんが爲めに吾人が與うるの價格なり。自然價格とは、之に反し吾人の欲するものを自然の大倉庫より取得せんが爲めに與えざるべからざる價格なり。

從來經濟學者は自然價格と市場價格とは、偶然的 時的の動搖にも拘らず、常に共通の水準に歸せんとして概ね之と等價となると論じたり、此れ誤謬なり、市場價格は常に、當時の慣習的利率を包含す、然らずんば産業は休止すべきなり。然るに自然價格は生産費換言せば貨物の生産加工に費さ

れたる資本より成るを以て、利潤率を包含する能はず。されば市場価格は自然價格に自己を等からしめずして却つて、慣習的利潤率だけ之を超過すべきなり。

市場價格と自然價格の一般的平等化を主張する筆者等は、自然價格即ち生産費なる名辭の下に慣習的利潤を包含せしむ。併し乍ら、この分類は頗る不正確且つ非學問的なり。資本利潤は決して、生産費の如何なる部分をも爲す事なし。否、それは新被造物なり。這個の失費の結果の結果存在するに到りしものなり。…されば資本利潤は生産費の一部を爲す事なく、該費用が完全に費されたる後に残る剩餘たり。農業家及び製造家はその仕事を行ふに於て、その利潤を費すものに非ず、彼等は之を創造す、それは最初の前拂の一部を爲さず。却つて後の收穫の一部を爲す。

シニョアは多大の好感を以て這個トレンズが批評を迎えたり。

「トレンズ大佐の所言は氏が批難しつゝある辭句に關する限り正常なり。洵に利潤は手段に非ずして成果なり。這個の成果の期待なくんば生産が繼續せられざるべきは眞なり。これ以外の動機を以てしては農業家をも製造家をも誘つて、その資本の不生産的享樂を抑制せしむる能はず。然れ共利潤の獲得が、收穫の生産費の一部を爲さざるは、食欲の満足が、食事の生産費の一部たらざる如く或は又防寒が衣服の生産費の一部たらざるに同じ」(Senior: Political Economy 1850. p. 100)。

然らば利潤に關するトレンズの意見如何。

「今、一農業家が、その農場の耕作に二百クオーターの小麦を費して二百二十クオーターを得たりと想定せよ。この場合收益の失費超過分たる二十クオーターが農業家の利潤を構成す。然るにこの超過分を以て失費の一部と稱するは不合理なり。失費即ち生産費は百クオーターなり。今やそは二十クオーターの剩餘を伴つて回收せられたり。この失費が回收せられたる後に残る剩餘が失費の一部たらざる限り然り、一百二十クオーターが一百クオーターに等しからざる限り、市場價格が自然價格に等しかるべきは不可能なり。」

製造業に於ても農業に於けると等しく資本利潤は生産費とは別個なり。主人たる製造業者は、一定量の原料商賣の道具器具、労働に對する生活資料を費して、之に對して或量の完成品を收得す。この完成品は之が獲得に前拂せる原料、道具及び生活資料よりも高き交換價值を有せざるべからず。然らずんば、主人はその仕事を繼續するの誘因を有する能はず。若し生産されたる價值が費されたる價值を超過するなくんば、製造業は休止すべし、然るに主人の利潤をなすものは、費されたる原料器具生活資料の價值以上に完成品が有する價值のこの超過分なり云々」(Ibid. p. 51-53)。かくの如く彼は利潤が生産費の超過分たる律を反覆詳述し又各所に利潤は剩餘なりとの言を爲せるも、然も不幸にして、如何にしてこの剩餘が發生せるかを論ずる事なし。

元來彼の價值論に従へば、社會が資本家階級と労働者階級に分離する以前にありては個人は如何なる種類の勤務にも従事し自己自身の勞作を自ら行ふ。この時代に於ては、生産に費されたる全労働量(直接的労働及び蓄積されたる労働)が交換價值を決定す。然るに資本が蓄積され資本家が労働者とは別個の階級となり、或種の勤務を行ふものは、自己の勞作を自ら行はずして他人に生活資料及び材料を前拂するに到れば、交換價值は、生産に費されたる蓄積労働量即ち資本額に依つて決定

せらるるといふ (Tarens ibid. p. 334) 之を立證し説明せんが爲めに彼は多大の頁を割けるも、然も遂に、何故に、投下資本の價值と、収益の價值の差を生ずるかを示す事なくたゞ、かゝる差なくんば生産の行はれざるべきを云々するに過ぎず。遺憾ながら「トレンズの缺點は遺漏の缺點なり」といへるシニョアの評言に讃せざるを得ず。

(三)

かくトレンズを評せるシニョアは何を以てその缺陷を補はむとするや。制欲 (abstinence) はこゝに主張せらる。冗長なる迂回の後に吾等は漸く本論に到達せり。

資本を生産要素なりと看做すの説は英國經濟學の傳統なり。所謂三生産要素説に於ても資本は依然その傳統的地位を保持して變らず。然るにシニョアは之を斥け代うるに制欲を以てせんとす。何故に資本は生産要素たるを拒まるべきや彼の答は簡明なり、資本そのものが生産物なるが故なり。曰く資本は人間努力の成果たる富の一種にして、富の生産及び分配に使用せらるゝものなり。かくの如き資本は單純なる生産要素に非ず。そは最も大多數の場合三生産要素 (自然的要素、労働及び制欲) 結合の成果たり」と、(Senior. Pol. Eco. p. 59)

然らばアブスチオニスとは如何。

最も豊沃なる地に住する最も勤勉なる人民と雖も、若しその一切の労働を即時的成果の生産に投入しその収益を生ずるに従つて費すならば、忽ちにして彼等が最善の努力も單なる生存要品を生産するにさえ不充分なるを見出すべし。茲に於てか労働及び自然的要素以外に一要素の必要を認め得べし。オニス (制欲) 之なり。

制欲とは自己が支配し得るものを不生産的に用うるを我慢し、又は即時的享樂の生産よりも、遠隔の成果の生産を擇むの行爲なり。

シニョアの「使用 (Use)」とは他の經濟學者の消費と同じ。故に不生産的使用とは不生産的消費といふに同じ、元來労働に關し生産的及び不生産的なる觀念は古くより存在せる處、カンニングガムの所説に依ればこの區別に相當すべき觀念は Nicholas Oresme の所論に暗示せられたりといふ。學祖アダムスミスが製造工業に従事する労働者を生産的となし僕婢を不生産的なりと看做せるは餘にも著名なり。シニョアはこの觀念を消費に適用す。曰く「生産的消費とは、將來の生産物を生ずる如き貨物の使用なり。不生産的消費とは將來の生産物を生ぜざる如き、貨物の使用なり。不生産的消費の特徵はその消費が消費者以外の何人の享樂をも増加せざる事なり。それが社會に及ぼす唯一の影響は、それだけ、他の社會員に充當すべき貨物總額を減少せしむる事なり」と。然も具體的に論せんか不生産的消費と生産的消費の區別は甚だ明瞭を缺くの觀あり。前者に屬する例として擧げられたるは煙草その他の刺戟物寶石その他の裝飾品等なり、後者のそれは道具エンヂン等なり、然るに大多數の貨物は、その所有者の意思如何に依りて、生産的ともなり不生産的ともなる。かくて例へば食物はその消費者が生産者なりや否やによりて、その同一の消費が時に生産的たり時に不生産的なりといふ。然も彼自ら生産的消費者と不生産的消費者の區別は、生産的消費と不生産的消費の區別より

も一層不明瞭なりと稱するに於て問題は、一層徹底を缺く、吾等は生産的消費とは、破壊されたる處のものに代りに何等の所産を生ずる如き消費」にして、不生産的消費とは、「之が使用に伴ふ直接の快樂以上に何等有益なる成果を生ぜざる消費」なりと云へる彼が言葉に甘んぜんのみ。

故に不生産的消費をアプステインするとは使用に伴ふ快樂を生ずるに過ぎざる抵の消費を我慢する事なり。

又直接即時の快樂の生産よりは將來の快樂の生産を擇むとはその意味大體前者に同じく、生産的消費とは結局即時の享樂よりも將來の享樂を擇ぶ行爲の一なればなり。併し乍ら例へば葡萄酒の貯藏の如き單なるウエイチングも後者に入るべし、故に制欲とは他の場所に於て、彼が言へる如く「享樂の延期」なり。普通にアプスチネンスは——かく彼は曰ふ——之に勞働が結合せざる時にのみ、注目せらる。例へば樹木家畜等の充分なる成長を俟つ人の如き行爲に於ては、直ちに看取せらる。然るに苗木の植付け或は播種の如き場合は前者に比ぶれば不明瞭なる如し、此れ觀察者の注意が勞働に奪はれて該勞働が遠き目的の爲めに行はれるに當りて之に附加して爲される犠牲を考ふるを忘るゝが故なり。この附加犠牲を吾人は「制欲」なる名辭の下に了解する。これ斯名辭が好適なる表現なるが故に非ずして、之に優る表現を見出し得ざるが故なり。一度は「用意(Providence)は如何と考へたるも用意は何等の犠牲を含まず従つて利潤に關係なし。雨傘を携帯するは用意なるも儲を生ぜず、後には「節儉」にせんかと思ひたるも、節儉は何程かの配慮と注意を意味す即ち何程かの勞働を意味す、實際に於ては、制欲は、殆んど常に或程度の勞働と伴ふと雖も生産要素の分析に當つては兩者を區別するの要あるは明なり。

以上は制欲なる語義の説明なり。次いで彼はその作用に關して曰く「制欲とは勞働及び自然的要素と異り一要素にして、資本の存在には之が協力を必要とし勞働が勞銀に對すると同一の關係に於て利潤に對する處のものなり」と。然るに純粹なる制欲は一の消極性にして、積極效果を生産し得ずと説くものあらむか、彼は答へて曰く「同一の言辭は『勇敢』にも、否『自由』に對し、さえも等しく適用せられ得べし。然るに之等を活動的要素に等しきものと看做す事に何人が反對したるや。自己の力の下にある享樂を我慢し或は即時的成果よりも遠き成果を追求する事は、最も苦痛なる意思の努力なり」(以上 Senior, *ibid.*, p. 54-60)。

かくの如くにして「利潤は制欲の報酬なり」との定義を産めり(*ibid.*, p. 128)この定義こそはシニョアの名をして經濟學說史上記憶すべきものたらしめたるなり。同時に彼をして、資本階級の代辨者たる如き非難を浴びるに到らしめたるものなり。併し乍ら之等の問題は暫らく之を後日に譲り、この制欲説に基ける彼が利潤論の如何なるものなるかを窺はむとす。

利潤とは既述の如く制欲に對する報酬にして、制欲とは享樂の延期なり。而して資本とはその存在又は保存を制欲に負ふの貨物なり。その所有者たる資本家はそれが作られ又は保存せらるゝ手段の前拂を爲す。該手段は一部は材料及び用具(茲に用具とは通常の手工勞働の道具のみならず機械、船舶、道路波止場運河等をも含む)より、一部は勞働より成る。勞働者は用具の援助を受けて、材料を變じて新販賣品となすこれ資本家の收穫なり。收穫の生産に際しては必ず勞銀及び材料が消費

せらる。かくて利潤はこの消費されたる前拂の價值と收穫の差より成る。

然らばこの差は如何にして決定せらるや。そは主として一國に於ける資本家及び労働者の既往の行爲に依る、即ち或既往の期間に於て、労働者用の貨物の生産約言せば勞銀生産に充當せられたる資本の價值と労働人口の既往の行爲が、存在するに到らしめたる労働者數に依るといふ (ibid. p. 188)。

之に對するシニョアの説明を聞かんに、妨礙原因なくんば一切の業務に於ける利潤率は等しかるべきを以て一の主要なる業務に於ける利潤率を支配する原因を確知するならば他の業務に於けるそれをも推し得べしと。

茲に於て、彼は一の假説を設立し純粹なる演繹的論法に依りて之を爲さむとする。

問題を簡單ならしめむが爲めに一少植民地を想定す、這個の植民地は肥沃なる土地豊富にして内外の暴行より免るるを以て、(A)地代及び租税存せず。(B)其處には、十人の資本家と一千二百個の労働家族居住す。(C)貨幣の使用なく(D)一切の建物、衣服、食物等即ち人民の全消費は一年間に消費し盡され、次年度に再た生産せらる。(E)各家族は年頭に一ヶ年分の勞銀を支給され、年末にその生産完了す。故に一切の前拂は年頭に爲され一切の收穫は年末に收得せらる。(F)植民着手の時に於て、各資本家は一百二十家族に對する一ヶ年分の勞銀を所有す。(G)該勞銀は前年度に於ける一百家族の労働の所産なり。今之を小麥一千クォーターと稱す。(H)此の他に、資本家用の貨物として二十樽の葡萄酒を所有す。こは、前年度に於ける二十家族の労働の所産なり。彼の假説は此の如く周到なり。

かゝる事情の下に於て各資本家が一百家族を就業せしめて勞銀を再生産し、二十家族を以て自家用貨物を再生産せしむるならば、労働人口に増減なき限り利潤率は年二割に止まるべし。即ち前拂は小麥一千クォーターにして之は一百家族の労働の所産にして一百二十家族の労働を支配す。收穫は次年度に於て一百二十家族の労働を支配すべき勞銀のストックと、資本家用の貨物のストックとなり、後者は全資本再生産の爲めの労働の六分の一即ち二十家族の労働生産物なり。かくて一ヶ年間の資本前拂に對する收穫の價值は、前拂の價值を六分の一だけ超過す。即ち労働者の六分の五は自己用の貨物の生産に従事し、六分の一は資本家用の貨物の生産に従事す。故に利潤率は二割なり。然るに今労働と資本との割合を變じたらんには、如何なる結果を生ずべきや。

移住其他の原因に依り労働家族が五十減じたるも資本は同一なりと想定せよ。等しく一千クォーターの小麥なるも労働家族減少の爲め一百十五家族の労働を支配するに過ぎず。従つて同額の資本の生産に要する百家族を控除せば、利潤生産に用ゐらるる労働家族數は二十より十五に減じ、利潤率は二割より、約一割五分に低落すべし。反對に労働家族數が五十増加せば各資本家は一千クォーターを以て一百二十五家族の労働を支配するを得べし。これよりして一百家族を控除せば利潤生産に用ゐらるる労働家族數は二十五に増加し、利潤率は二割より約二割五分に昂騰すべし。之と異りて労働家族數は依然一千二百にして各資本家が從來の如く一百家族を勞銀生産に二十家族を利潤生産に用ゐるをやめて、一百五家族を勞銀生産に投ずるとせば、各資本家はその年の終りに一百五家

族の労働の所産にして且つ、依然一百二十家族の労働を支配すべき一千五十クオーターの資本を有すべし。この場合には利潤率は二割より一割五分弱に下る。反対に九十五家族を労働生産に、二十五家族を利潤生産に用うる時は利潤率は、二割より二割五分強に昂騰すべし。故に、最も單純なる状態に於ては利潤率は資本家と労働者の既往の行爲に左右せらる。

如上の推論に於ては、シニョアは十人の資本家が一體となつて活動するものと假定せり。かゝる假定の下に於ては資本の永久的増加は労働者数が不變なる限り、之に比例して利潤率の減少を惹起す。故に人口増加の不可能なる處に在りてはその停滞せる人口に對して正に、生活必需品を生産するに足るだけの労働を労働生産に投じ、又、人口が増加しつゝある場合には、正に之を増加せしむるに足るだけの労働を労働生産に投じて即ち労働者を遇するに農夫が馬匹を、奴隷所有者が奴隷を遇するが如く爲すを以て資本家の利益となす。

かゝる事情の下に在りては資本家が全く自己の利益に依りて支配せらるゝと想像せば利潤率は一部は労働の生産力に、一部は前拂と收穫の間に經過する期間の長短に左右せらる。前拂期間が興えらるれば労働の生産力に依り労働の生産力が興えらるれば、前拂期間に左右せらるゝなり。

然るに一國の資本家は一體となつて活動するものに非ず。各自は各自の利益を追求して他の資本家を省みるものに非ず。洵に彼等の間に於ける競争に依りて資本及び人口は増加するなり。

今十人の資本家中一人が一百十家族を労働生産に投ずるものとせば、その年の終り於て彼は一千クオーターの小麥を有す。これは現在の労働率を以てせば一百三十二家族の労働を支配し得べし

かくて一國全體の資本額は一萬クオーターより一萬一千クオーターに増加し、一千二百十二家族の労働たり得べし。然るに労働家族数は不變なるを以て、利潤は約一分強下落すべし、この下落は該資本家をしてその蓄積の利益を充分に收むる能はざらしむ。彼は一千二百クオーターの小麥より成る資本を所有して一百三十家族餘の労働を支配す。他の資本家達は一千クオーターの小麥を有するも、その支配する労働は一百十九家族たらずにすぎず。かくて最初の一資本家は、利潤率は約一分方下落するも、資本の價值及び利潤額は増加せるをみる。然るに他の資本家は總て、資本の價值も、利潤額も、共に減少せるをみるなり。茲に於てか彼等は、利潤率を犠牲にしても、資本の價值を毀損せざらむと努力し、次ぎ次ぎと最初の資本家に倣ひて、従前自家用貨物の供給に使用せる労働の一部を割いて労働生産に投ずるかくて遂に一國の平均利潤率は一分方下落するも、年々の所産は一萬一千クオーターの小麥と、一百樽の葡萄酒より成るに到る。

然れども、かゝる利潤率の下落は労働家族数を不變なりとする假定に基いてのみ眞なり、然るにかくの如きは殆んどあり得べからず、労働の増加は労働生産力にして等しき限り資本と労働者の割合を従前に復するまで人口を増加せしむと。かくてシニョアは既に二つの假説即ち資本家が一團となつて活動する事及び労働者数の不變の假説を撤去して、問題を次第に現實に接近せしめたるが、更に又、一國が肥沃地を豊富に有するとの假説をも除き、人口稠密なる國に於て、斯問題を考察して曰く「人口稠密なる國に於て労働の諸力が人口増進の間、不變なるは殆んど在り得べからず。工業に於ては之に伴つて労働はより生産的となり、農業に於て勤勞又は熟練の増加若しくは土壤の永

人的改良に援助せられずんば却つて減少す。然るに労働者の消費する處は主として原産物又は輕微なる加工品なるが故に、工業品の獲得が一層容易となりても、原産物取得の困難の増加を補ふに足らざるべし。故に舊國に於ては利潤率が資本増加に依つて下落せる場合は之が回復は勞銀が下落なるが又は劣等耕作の必要が緩和せらるゝなくんば、望み難かるべし。

更に又一つの假説撤去せらる。一國の全資本が毎年消費され再生産せらるゝの假説之なり。資本家が勞銀生産に投ずる百家族に更に五家族を加うる代りに之を機械の生産に投じ、該機械は二人の人手を要したる仕事を一人にて爲すを得しむるものとせよ。第一年の終に於て、各資本家は一百家族の労働の處産たる一百二十家族分の勞銀と十五家族の労働の所産たる自家用の貨物と、而して五家族の労働の所産たる機械を有す。然るに次年以後に於ては、彼は九十九家族の使用に依つて一百二十家族分の勞銀を取得し、自家用貨物の生産に二十一家族を使用し得べし。従つて利潤の率も額も何等勞銀を減少する事なくして、増加すべしと。

以上を總括して謂へらく、「勞銀生産に於ける前拂の價值と收穫の價值との差は、その時期に先だつ期間に於て勞銀生産に投じられたる勞働量と、この勞銀が生産せられたる曉に支配し得べき勞働量との割合に左右せらる」(Senior ibid. 188-194)。

以上を以て不完全ながら利潤の意義その率及び額を支配するの法則に關するシニョアの説を紹介せり。殘る所は分配論に於ける利潤の地位即ち利潤が地代及び勞銀に對する關係なり。このうち、勞銀に對する問題は、利潤を説明しつゝある間に於て、自然に説明し終えたり。又嘗つて本誌に於てシニョアの賃銀論を紹介したる際にも、相當之に論及せるを以て此處には之を省略し單に地代に關するもののみを述べんとす。

地代と利潤の關係は地代の意義を明にするに依りて解かるべし。

リカードオは地代を定義して「地代とは、土地生産物の一部にして土壤の原始的不滅の諸力の使用に對し、地主に支拂はるゝもの」と云へり(Ricardo, Prin. of Pol. Eco. Gonnert's ed. p. 44)。この意義に於ける地代の説明は、所謂リカードオの地代論として周知のものなり。シニョアも亦大體に於て之を踏襲すると共に更に之を擴張し一切の無犠牲所得をこの名辭中に抱合せしめたり。彼の意見に依れば労働の報酬たる勞銀及び制欲は共に犠牲に對する報酬なり。然るに例へば心身の特異の性質より生ずる特殊利益の如きは、この兩者の各れにも該當せず。これ等は土地地代と其の性質類似するを以て、之等をも地代と同一に取扱はむとするなり。即ち「地代とは、自然又は幸運が收得者側に於ける何等の努力なくして、與うるもの若しくは勤勞の行施又は資本の使用に對する平均的報酬以上に與うる一切のものなり」従つてそれは一種の「剩餘所得なり」(Senior ibid. p. 91)。故に、それは勞銀又は利潤よりの控除と看做さるべきに非ず、従つて一國の生産物の分配に於て、前二者と競合するものに非ずして別個の源泉より生じたる収益なり。

勞銀、利潤及び地代の意義は、上述の如くにして一見明瞭に區分せられたる如しと雖も、それは單なる抽象的論議に於て然るのみにして、實際に當りては、頗る多大の困難を伴はざるを得ず、彼自身も亦之を認めたり。

良く耕作せられたる土地の土壤の價値の大部分を構成する諸改良は、總て且つ永久に資本と稱せらるべきや、ローマ人が埋立てたるリンカーンシャーの土地の現所有者が、小作人より受くる支拂はレントに非ずして、十五世紀前に費されたる資本の利潤と稱せらるべきや。答に曰く、レントと利潤の區別は、資本がその存在を、その人の制欲と努力とに負はざる者に與えらるゝ時は全く無用に歸す。船渠、運河等より生ずる収入はその最初の建設者の手中に於ては利潤たり、そは彼の制欲に對する報酬たり。然るに彼の相續者の手中に於てはレントの一切の屬性を具有す。彼にとりて、そは幸運の賜にして犠牲の成果に非ず。洵にかゝる収入は船渠又は運河を賣却して、その代價を享樂に費さざるの制欲に對する報酬なりといはゞいひ得べからむも、然らば同一の事は、一切の可讓財産に適用せらるべし。凡ゆる所有地は、之を賣却してその代金を浪費し得べし、されば若しかくの如き分類を採用せんか、經濟學者がレントと名付くるものの大部分は利潤と稱せられざるべからず。云々 (ibid. p. 128-130)

## (四)

ロングフィールドも亦制欲説の核心ともいふべきものを捕えたる如し。

貨物は、最後に、之を購入して、之が興うる享樂を求めて消費する者の手に歸する事、に到るまでは、之を生産する勞働は未だ享樂を生産せるものに非ず。而して貨物の生産及び交換に従事する者は彼等の勞銀及び利潤を何等か他の生産的源泉より引出さざるべからず。この事は窮局の消費が起るまでに數世紀の時間が介在する事あるも、依然眞實なり。勞働者も資本家も、利潤又は勞銀を受くる事なくして、かゝる長時間止まり得るものに非ず。乞ふ、如何にしてそが緩和せらるゝかを檢せしめよ、勞働者は彼を雇傭せる工業家に依つて支拂はる。而して彼はその勞銀を自己が適當と信ずる道に費し、自己の生産物は未だ何人に依つても消費せられずと雖も、彼は他人の勞苦の生産物を消費す。彼は、利潤を得んが爲めに自己の左右し得る享樂を抑制せる人より引き出されたる前拂に依つて生活す (He is subsisting on an advance derived from some person who, for the sake of profit, abstains from enjoyment with in his reach)。又工業家は之を卸商に賣り、卸商は之を小賣商に小賣商は再た消費者に賣る。各自は該品物の所有が移るべき自己の次の者より、利潤と共に前拂額を受領す。各自は自己に先だつ所有者に豫め存在する貨物を以て支拂ふ。この貨物はこれをかくの如く利潤の爲めに費さずして享樂の源泉に變せんすれば變じ得べかりしものなり。然るに貨物が不生産的消費者の所有に歸するまで、該貨物享樂の停止あり。彼は之が製造の勞働及び、一切の介在せる利潤を支拂ふ。雇主は直ちに勞銀を支拂ひ、之に代つて勞働の價値を收得す。この勞働は最も有利に處置せらるべきなり、雇主は利潤の爲めに之を爲す。故に品物に固着又は移されたる勞働の價値は該勞働の勞銀よりも大なり。この差額は資本家の前拂に對する利潤はり。利潤率は資本家の爲せる前拂と、彼が收得する收穫の割合並びに該前拂が爲さるゝ時間の長さに左右せらる云々」 Longfield. Lectures on Pol. Eco. 1834. p. 166-170。

ロングフィールドが「講義」は一八三四年に出版せられたり。之に對しシニョアの「經濟學」の出版は一八五〇年なるが故にその間十六年を経過せりと雖も、この「經濟學」は一八三六年出版の「經濟

學概論」をエンサイクロペディア、メトロポリタナ中に採録したるに過ぎず。故に實際はロングフィールドの講義とシニョアの「經濟學」とは僅々二ヶ年の差を有するに過ぎずと雖も兎に角「經濟學」が「講義」に後れたるは事實なり。然れ共一八三〇年の出版にかゝるシニョアの「Three Lectures on the cost of obtaining money 中に吾人は abstinence なる文字を見出し且つそれが勞働と共に生産費を爲すものと考へられたるをみる。

「若し勞銀の差が全く利潤率の差より生ずるならば、勞働者の失ふ處は總て資本家の得る處となるべし。従つて等量の勞銀と利潤を費して、或は吾人の用語を以てせば、等額の勞働と制欲に依つて生産せられたる貨物の、銀に於ける總價值は等しかるべし」と。(ibid. p. 4) 茲には、制欲なる語義に關して何等の説明を加えず、單に「吾人の用語を以てせば」といへるに過ぎず。この事よりして、既に何等かの機會に於て、制欲なる語義が説明せられたりしものと推測するを得べし。恐らくは、一八二七年、牛津大學に於て行はれた講義「Introductory Lectures before the University of Oxford」に見出さるべきか。不幸にして、此書を未だ見るを得ざる私にとつては、こは單なる推測にとゞまる。各れにせよシニョアの「制欲説」は、ロングフィールドの講義出版以前に主張せられたるは明なり。又 Palgrave's Dictionary は前記「講義」以前に出版せられたるロングフィールドの著書あるを記せず。然らば、斯説は依然シニョアの創意にかゝるものと稱するを得べきか。それにしても、ロングフィールドが、遂にシニョアの名を擧げず亦シニョアも、前記「講義」に後る、一年即ち一八三五年に出版せられたるロングフィールドが「Lectures on Commerce and Abstinence」を他の個所に於て引用したるに拘らず。(Senior, Pol. Eco. p. 161) その得意の制欲説に關し、自己と殆んど同じき説を主張しつつある「講義」を引用せざりしは如何なる理由に出でたるべきや。

併し乍ら小泉教授の言はれたる如く、制欲の思想は決して新奇なるものに非ず。ボエームバヴェルクの傳うる處によれば Scrope の如きその有力なる先驅者と看做さるべきものなり。

「Neben's は資本の勤務の交換價値の説明を、資本が多少ともに苦痛なる<sup>フライツ・イン・シニョ</sup> 缺乏又は努力を通じてのみ獲得し得らる、事及び人が之を負担するは、之に應ずる利益を取得し得るに依つてのみなる事に見出せり。

スクロープは同一の觀念を一層直接的に披瀝せり。生産に費されたる資本の補填以上に、若干の餘剰が資本に對して残らざるべからざる所以を説明したる後「資本の所有者がその資本の生産的使用に依つて獲得する利潤は或期間彼の財産の一部を個人的満足に消費するを<sup>アブステイネ</sup> 抑制せる事に對しての彼への補償なりこの點より考へらるべきものなり」と明言せり (Scrope Principles of Pol. Eco. p. 1416) (Böhm-Bawerk. Capital and Interest 1830. p. 271. 然れ共吾人は此處に於ても本書の出版が一八三三年なるを注意せざるべからず。シニョアの Lectures on the cost of obtaining 1830 に、二ヶ年後れ Introductory Lectures 1827 に六ヶ年後るものなるを記憶せざるべからず。

各れにせよマーシャルの所謂 waiting としての Abstinence なる觀念は、資本の作用利潤の發生等に關して、相當深き理解を有する者の腦裡には、自ら浮び出づる思想なるべし、たゞ彼以前の英國經濟學者は、之を更に深く解剖して遂に「制欲」なる個人の心理的活動にまで還元する事なかりしな

り、云ひ得べくんば、シニョアが英國經濟學に於ける利潤論に占むる地位はこゝに存すべし、固より既述の如く利潤率騰落の原因に就いても彼は多くをいへり、と雖も、彼處にありては制欲なる文字を使用するも寧ろ資本といふの一層適切なるを感ずるなり、彼自身と雖も、屢「資本」を云へるなり。されば、吾等は先輩津田誠一氏が「彼の利子論史上に於ける功績は専ら利潤成因論に存す」との言葉に讚意を表するものなり。併し乍ら同時に「彼の制欲説を以て、「正統學派の利潤論の最大收穫なり」と云ふも、敢て過言には非ざるべし」との見解に對しては、稍躊躇を感ずるものなり、之を肯定すべく吾等はラッサアルの批評が餘りに明快なるを忘るゝ能はざると共に、制欲は單なる消極的行爲なりとの有力なる批難に對するシニョアの答辭が、顧みて他をいふの觀あるを嘆せざるを得ざるなり。

最後に彼の所説は如何なる批評を受くべきものなるや。

イングラムは利潤と勞銀の關係に關する彼の説明を以て「特に價值あるものなり」といへり(J. N. Ingram, History of Pol. Eco. p. 136)

Davenport は「利子は生産要素としての制欲の奉仕に對して支拂はるゝに非ずして資本の奉仕に對して支拂はるゝなり」と評せり、吾人はこの批難が頗る肯綮に當れるを覺ゆ。洵に資本の存在は、制欲に負ふ處あるべしと雖も、その故に直ちに利潤は制欲の報酬なりとは斷じがたし。しか論ずるが爲めには、制欲の大小と利潤の大小とが一致せざる事の餘りに多きを、他の事情にして等しとすれば、或量の資本の利潤は倍量の資本の利潤の二分の一なるべし。然るに制欲者側に於ては或量の

制欲の苦痛が必ずしもその二倍量の制欲の苦痛の二分の一となるものに非ず。又、或期間の利潤額はその二倍の期間の利潤額の二分の一なるべし。然るに制欲の苦、痛は必ずしもしかあるものに非ず、事實、彼は、利潤成因の説明に際しては、その苦痛、犠牲等を云ふも利潤騰落論に於ては全く之を數量的にみたり。元來人の苦痛快樂の如き感情はしかく數量的に測定し得るものに非ず。況んや苦痛の大小と苦痛の所産の大小、更らに進みては、該所産の使用の利益の大小とは決して比例するものに非ざるに於てをや、洵にシニョアは、その制欲説を利潤成因の説明にのみ適用すべかりしなり。殊に幾多の不便と混亂とは利子と利潤が區別せられざりしより發せり。市場の景況に左右せらるゝ、利潤の騰落を、之に全く關係なき人の心的苦痛に依つてのみ説明せんとするその事が既に多大の困難を豫想せしむるなり。之に反し利子に關しては遙になだらかに適用せらるゝをみる。こはやがてボエム、ヴァエルクの利子説を生むの母となれり。

ボエム・ヴァエルクは、斯説の含む諸缺點を三つに分類せり。曰く「シニョアは、それ自身全く正當なる觀念の上に、餘りにも、一括的なる概括を爲し又それを餘りにも典型として使用したり。満足の延期なる一要素が、利子の發生に一定の影響を及ぼすは疑ひなしと雖もその影響は、利子を以て單に「制欲の勞銀」なりとして説明し去るを許す程に、しかく單純、直接又は抱括的のものに非ず」と、又曰く「シニョアは彼の理論中實に正當なる部分を、攻撃され易き形に於て表明せり、余は制欲を以て一個の獨立的犠牲と看做すを以て、一の論理的缺陷なりと信ず」と。又曰く「シニョアの説の第三の缺點は彼が利子を以て價值論の一部となし以て、生産費に依つて貨物の價值を説明せる事な

これ等の所言中、第三のものを少しく詳述せんにたゞヘス説の正當なるを許容して、「費用の法則は、任意に如何なる量に於ても再生産し得らるべき一種の財に關してのみ、明白に通用す、故にシニョアが彼の利子論をして、單に部分的なる價值論の要素となす限り、斯説は部分的たり得るに止まる。そは、任意に再生産し得る貨物の生産に於ける利潤を説明するを得べしと雖も、それ以外の利潤は總て、その埒外に出づるの理なり。」

本論文を終らむとするに當つて、私はボエーム、バヴェルリの言葉を引用せんとする。シニョアの制欲説は利子に味方する經濟學者の間に、多大の人氣を博したり。併し乍ら余を以てみればこの人氣は理論としてのその權威よりも、寧ろ、利子に對する峻烈なる攻撃に對して之を支持すべき好時機に來れるが故なり、余が、かゝる推論を爲すものは、後の斯説の代表者の大部分が専らこれのみを公言する事なく、利子に有利なる諸他の説に、制欲説を加味するの折衷的方法に於て爲せるの事柄より發す。こは、一方に於て、理論としてのその重要さを低く評價せるを示せるものなり。他方に於て、利子の合法を立證するに足る理由さえ得らるゝなれば、満足せしめらるべき實際的政治的立場に對する選好を示すものなり。

かくて吾人はシニョアの追隨者の大多數を折衷論者中に見出す J. S. Mill, Jevons, Garnier 等之なり。制欲説を單純に保持せるものには Carnes 最も顯著なり (Ibid. p. 277-287) シニョアが制欲説の發展如何。そは後日の問題なり、今日は、たゞその力強く擧げられたる孤々の聲と將來の成育を豫想せしむる姿とを傳うれば足る。

### 前號 (第二十一卷) 第六號 目次

- ◎第十七世紀英國の民權思想と新敎 榎 智雄
- ◎割賦販賣制度と消費金融 向井 鹿松
- ◎社會保險の給付に就て 團 乾治
- ◎マルサス人口原理の本質 竹村豊太郎
- ◎十九世紀前半の獨逸社會思想史文獻大要 加田 哲二
- ◎ブルノオ・ビルデブランドの一書簡 平井 新
- 「共產黨宣言」成立史の一資料——
- ◎三田學會雜誌第二十一卷前半總目次

<p>●一冊定價金五拾錢 ●半年分金貳圓九拾錢 ●一年分金五圓四拾錢</p> <p>●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛 ●營業に關する用件は發賣元宛 ●原稿締切期日は發行の前月十日限</p> <p>昭和二年六月三十日印刷納本 昭和二年七月一日發行</p> <p>每月一回一日發行</p>	<p>三田學會雜誌 第二十一卷 第七號</p> <p>編輯者 江田 範 保 發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 印刷者 金子 鐵 五 郎 印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子 活 版 所</p>	<p>發賣元 丸善株式會社三田出張所 東京市芝區三田貳丁目壹番地 電話高輪 一九二六</p> <p>尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す</p>	<p>發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會</p>
---	---	---	---------------------------------